

地域ささえあい強化推進員 地域福祉コーディネーター 令和2年度活動レポート

地域ささえあい強化推進員・地域福祉コーディネーターとは

区では、地域の自助・互助による“ささえあいの地域づくり”を推進するため、「地域支え合い推進事業」として、各地域に「地域ささえあい強化推進員」を配置しております。地域でのちょっとしたお困り事などに対して、地域でささえあうしくみを一緒に考えますので、ぜひお声掛けください。

また、本事業は、地域福祉の推進において、区とパートナー関係にある、大田区社会福祉協議会(社協)の「地域福祉コーディネーター」と一緒に取り組んでおります。

このレポートでは、令和2年度、新型コロナウイルス感染拡大によって地域での様々な活動が難しい中、メンバーが地域に必要な“つながり、助け合い”をどのように考え、活動してきたのかをご紹介します。

令和2年度活動メンバーの紹介

基本圏域	氏名	基本圏域	氏名
大森	村松信江	調布	朝倉香
	小菅健司		土屋健
	河野由紀子(社協)		武藤溪一(社協)
蒲田	渡部達郎	糺谷・羽田	大野悦子
	櫻井潤二		高野愛三
	榎本庭子(社協)		南雲好晶(社協)
	大向春花(社協)		

※それぞれ活動歴が異なるため、取組み内容や進み具合に違いが生じています。

問い合わせ先

大田区福祉部福祉管理課 電話：03-5744-1721

大田区社会福祉協議会 電話：03-3736-2266

※地域ささえあい強化推進員は大田区福祉管理課からの委託業務で活動しています。

※本レポートでは、「地域ささえあい強化推進員」と「地域福祉コーディネーター」両者を指す場合、「ささえあい推進員」と表記する。

※本レポートでは、「民生委員児童委員協議会」を「民協」と表記する。

※本レポートでは、「民生委員・児童委員」を「民生委員」と表記する。

※本レポートでは、「地域包括支援センター」を「包括」と表記する。

※本レポートでは、「シニアステーション」を「SST」と表記する。

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 地域の皆さまとの連携強化、新たな担い手の発掘、地域を知ること等を目的に、民協、シニアクラブ等の集まりや各地域施設に積極的に足を運ぶ。
- 関係機関との連携強化のため、密な情報交換を行い、地域の把握を行う。
- ささえあい推進員の活動について、区民に積極的に広報する。

この取組みを行うきっかけ

コロナ禍での地域活動について、民生委員と検討したことをきっかけに、民生委員の手芸グループの活動にヒントを得て、取組みとして一つの作品を地域で作り、見える形で地域住民がつながりを感じられることができないかを協議し、今回の企画がスタートした。

取組みについて

地域応援プロジェクトを企画・調整

- 地域の方が、コロナ禍において自分の思いを銀杏の葉に模したメッセージカードに記し、一つの大きな木になって見える形にできるよう企画した。大森西地区民協との共催で、地域の自助・互助力の強化、関係機関との連携強化、今後の地域活動の円滑化を目的に実施した。
- シニアクラブ等、約40団体の協力が得られ、銀杏の葉のメッセージカードは約2,200枚集まった。
- この企画を通して関わった団体同士で新たなつながりが生まれた。

コーディネーターとしてサポートしたこと

- 参加団体が安心して取り組めるように、感染症拡大防止によく配慮して、多くの人が集まらずに活動できる仕組みで実施した。
- 地域活動団体同士の新たなつながりを生み出すため、多分野・多世代の団体への声掛けをした。
- 今回の取組みで生まれた、新たなつながりが途切れないよう、参加団体に実施報告を行うのと同時に、次回開催のアナウンスと協力継続の依頼を行った。

「げんきになる木」を商業施設など4か所に展示



コロナ禍で人とのふれあいや関わりが制限される中、「ひとりじゃないよ！みんなつながっているよ！」という思いを感じていただきたい、この取組みを行うことで地域のみなさまが一体感を感じてもらえるシンボルとなればと考え、民生委員と協力してこの地域応援プロジェクトを企画した。

今後力を入れていきたいこと

- 地域住民が地域課題について話しあう場をつくる。
- 多くの地域のみなさまの声を聴く。
- 地域の人材を発掘する。
- 既存の地域活動をリスト化する。

今年度力を入れた取組み 大森地区 小菅 5ヶ月

地域とつながるための第一歩

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 大森地区のまちづくりの協議体に参加し、地域情報の収集や関係者との顔つなぎを行う。
- 地区民協等の会議に参加し、町会・自治会の課題共有を行うとともにささえあい推進員の役割周知を行う。
- 地域拠点となる場所(大田福祉作業所・特別出張所・コミュニティセンター等)を回り、コミュニケーションを図りながら地域づくりの担い手発掘を行う。

この取組みを行うきっかけ

大森地区では、ささえあい推進員が令和2年度より初めて配置されたということもあり、役割や意義などの周知が進んでいなかった。しかしながらささえあい推進員単独では地域の関係性づくりをしていくのは困難であるため、少しずつ協力者や担い手を探していくことが大切だと考えた。

取組みについて

広報誌の作成・配布

- 大森地区は、ささえあい推進員が令和2年度から配置されたこともあり、まずは、活動内容を周知するための広報誌を作成・配布し、地域への挨拶周りにて関係性を構築しながら、協力者や担い手の発掘を行った。

オンライン介護予防教室の実施

- SST と連携し、オンライン介護予防教室を開催している講師による体操講座を開催することができた。開催後、参加者の満足度が高く、コロナ禍で対面での教室が困難であることから、プログラムを組んで、今後も定期的にSSTにて開催することとなった。

コーディネーターとしてサポートしたこと

- 感染症による影響で、ささえあい推進員だけの活動は困難であった為、SST 職員や利用者の声を聞きながら必要な情報提供など、適宜連携を図った。
- SST で行われるプログラムに積極的に顔を出し、シニア世代の人々がどのようなことに興味があるのかを情報収集に努めた。
- 地域のフレイル予防活動を行っている事業所への挨拶まわりの際、名刺交換だけではその後の関係性の発展になりにくいため、その場で相談や情報交換等ができるように、顔合わせの目的を明確にし、聞き取りポイントの整理や、地域ささえあい強化推進員の役割について理解を深めるための事例紹介の準備を行った。



↑メンバーや活動内容の周知のツールとして大森地区ささえあいニュースレターを季節毎に作成し、関係機関に配布した。

今後力を入れていきたいこと

- WEB 会議や報告会などを活用し、見守りささえあいコーディネーターや各包括との相互連携を強化する。
- 行政とささえあい推進員が協働で働きかけ、自治会・町会との相互連携を強化する。
- 住民が自分の地域へ愛着や関心が持てるきっかけづくりや有効な地域情報の発信方法について検討する。
- 地元学生が参加するプラットフォームを展開する。
- イベント周知やボランティア募集などに活用するために、SNS を有効に活用する。

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 地域へ出向き、生活者視点での地域特性を掴む。
- ささえあい推進員の役割周知のために、地域で活動をされている方とのコミュニケーションを取ることのできる場へ積極的に参加する。
- 区内の地域福祉活動団体の活動に参加し、活動のやりがいや課題等を伺い、ささえあい推進員として支援できることを考える。
- 民生委員と懇談する場を設定し、個別課題や地域の課題について情報共有を行う。

- 地域住民だけでは解決が難しい課題などについて共有し、解決にむけた支援などについて考える場をつくる。

この取組みを行うきっかけ

- 大森地区は今年度からささえあい推進員が配置されたため、まずは顔の見える関係づくりが重要と考えた。
- 地域福祉コーディネーターが地域に根付いていない事を実感したため、役割を知ってもらうことを目的に活動実績を積み上げる必要を感じた。

取組みについて

関係づくり

- ささえあい推進員の周知に注力し、活動や役割を紹介するツールとして定期的にニュースレターを作成し配布した。民協や地域力推進会議へも積極的に出席し、役割や活動実績の報告などを行い、顔の見える関係づくりを行った。また、地域活動団体が抱える課題を把握し解決に繋がるよう一緒に検討する機会をつくった。

コロナ禍における活動団体への支援

- コロナ禍において活動を休止している団体や活動場所が借りられなくなった団体に対し、場所を提供してくれる支援者を探し交渉し、場の提供団体と活動団体を繋げた。
- 高齢化で活動がとまっていた自主活動グループの活性化を目的に団体を応援してくださる団体を探し交渉し、活動再開に繋げた。

地域の課題を把握

- 民生委員との懇談会を開催し、地域における生活者視点での地域の現状（課題）を把握する場を設定した。
- 大田区社会福祉協議会に集まる活動団体の情報を地域ごとに集約し、活動状況や課題の把握に努めた。
- 地域で活動している活動団体のネットワークを活かし、互いに繋がり活動を活性化することを目的とした話し合いの場を設けた。

コーディネーターとしてサポートしたこと

- 話し合いの場を設定して、互いを知る機会を作った。
- 活動内容や目的などを把握・理解し、マッチングを行った。
- 活動団体や自主グループの横のつながりを強化し、情報交換をすることで、次の展開に広がるよう努めた。
- 活動情報やイベント情報へのアンテナを強く張り、参加できるイベントや講座には参加し、小さな情報でも積極的に収集、その情報を活かした。

今後力を入れていきたいこと

- ささえあい推進員の活動や役割を分かりやすく住民に理解してもらえるよう活動実績を積んでいく。
- 顔の見える関係づくりを計画的に実施していく。
- ささえあい推進員の存在価値を高める活動をする。
- 地域の歴史や特性を知り、その地域の生活者視点に寄り添った地域活動を展開する。
- 話し合いの場「まち会議」の設定や展開をする。
- 「だれ一人とり残されない」地域づくりを展開する。

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 自分の配置地区だけでなく、調布地区全域の活動内容を把握していくよう、各包括等との連携を密にした。
- ささえあい推進員とは何か？どんなことができるのか？を知っていただくことで、地域住民や関係機関から声をかけていただけるように意識した。

この取組みを行うきっかけ

コロナ禍における関係機関からの情報により、自粛期間における自助努力の必要性をいかに伝えるが課題となっていることを把握したため、ささえあい推進員の活動をいかに周知するかを大切にし、広報誌を作成・配布に各包括や行政を回り、地域アセスメントのための打ち合わせを実施した。また、コロナ禍で思うような活動ができないという声を聞き、今だからこそフレイル予防推進の必要性を感じた。

取組みについて

フレイル予防等を推進

- ささえあい推進員の周知やフレイル予防の啓発を目的とした広報誌の発行や、地域の自助力・互助力を高めるための健康講座を開催した。
- コロナ禍における、令和2年度調布版フレイル予防講座を調布地区担当と協議し完成させ、各地区で5回程度の講座を実施できた。
- エリアを超えた活動を中心に、各包括との情報共有、つなぎ支援に力を入れることでよい関係が築けるよう意識し、講座の依頼を受ける等、新たな関係者とのつながりができた。

コーディネーターとしてサポートしたこと

- ささえあい推進員は単独で動くのではなく、関係機関との横のつながりが重要と考え、各包括、特に見守りささえあいコーディネーターとの連携に力をいれた。
- 地域住民への働きかけや情報収集について、今までの関係性を活かし、活動の有無に関わらずコミュニケーションがはかれるように定期的な連絡、情報把握に努めた。
- フレイル予防については、ささえあい推進員ならではの視点を入れた講座の実施を目標とし、多職種の助言も受けながら調布版の講座を作成、実施することができた。



今後力を入れていきたいこと

- 「フレイル予防」「情報通信機器の活用」「防災」といったテーマは継続して取り組む。併せて、コロナ禍の影響か、認知症関連の困難ケースが多発していると感じるため、認知症見守りネットワークの構築に力を入れる。
- 地域住民との関係作りや関係機関との信頼関係の構築は、時間をかけて行う必要があると改めて感じた。引き続き、関係性の構築に努め、新たな発想の「つながり」が提案できるように情報収集、アンテナを張りつつ、地域住民と一緒に地域づくりをしていくという気持ちで地道に活動する。

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 地域住民との関係性づくりやささえあい推進員の活動を周知する。
- 各包括や会議等に出向き、地域の情報等の収集、把握に努める。
- SST、老人いこいの家、シニアクラブ等を訪問して、地域の情報の収集とともに、地域のキーパーソンを見つける。

取組みを行うきっかけ

- コロナ禍において、3月頃から地域活動が軒並み休止になり、人との集まり、関わりが制限されるようになった。そのため、人と人との対面によるコミュニケーションが取りづらくなり、情報通信機器を活用したリモートによるコミュニケーションが有効になった。
- 特に、災害時等は情報通信機器が情報収集の際の主な手段になっている。

取組みについて

スマホ教室等の企画・調整

- 情報通信機器の活用を推進するため、地域アセスメントを行いスマホ教室等の開催を提案した。
- 雪谷地区の地域座談会では、リモートによる体操講座に向けて高齢者がスマホを扱えるよう情報提供をした。田園調布地区では、「スマホにチャレンジ（写真を撮って発表してみよう）」といった企画の実施を予定している。その他、調布地区のSSTや老人いこいの家にてスマホ教室を開催した。



コーディネーターとしてサポートしたこと

- 見守りやささえあいコーディネーターや地域福祉課と連携を図り、情報の収集、提供、共有を行った。
- SST や老人いこいの家に継続的に訪問をして、利用者、職員とコミュニケーションを図り、関係づくりに力を入れた。
- SST でのスマホ講座に訪問して、参加者の状況を把握し講師とコミュニケーションを図り、次につながるよう関係づくりをした。

今後力を入れていきたいこと

- 地域の情報や課題を収集するために、各関係機関や地域の方々と関わり、信頼関係をつくることの大切さを感じた。今後は、有事の際にスムーズに連携していける体制をつくれるように信頼関係づくりを強化していく。

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 地域に出向いて、活動を共にしながら、地域住民や活動団体の方、災害の当事者の話を丁寧に聞く。また、ささえあい推進員の活動の周知をする。
- 各圏域の見守りささえあいコーディネーターと定期的に情報交換を行い、連携することで広汎な地域の情報を収集することで理解を深める。
- 住民だけでは気付にくい部分や、福祉ニーズについて、自分ごととして理解してもらうための気付きや提案を行う。
- 地域活動はその地域だけの課題ではなく、他の地域にとっても大切な活動であることを伝え、活動内容の情報共有についても提案する。

この取組みを行うきっかけ

- 令和元年度台風 19 号による水害を踏まえ行われた、住民懇談会に参加し、災害当事者からお話を伺い災害時のみではなく、その後の長い期間での支援と地域住民同士の支え合いや思いを語ることができる場の必要性に気付いた。
- 現状は、特別出張所圏域など大きい単位で活動を行っていることが多いが、地域によっては生活圏域が分断されているため、単一町会など小地域での活動をベースに話し合いや活動を行い、住民の生活圏を基本とした活動の実施が必要だと考えた。
- そのため、地域住民自らが災害時の支え合いについて理解し、動くことができる土台作りが必要だと考えた。

取組みについて

町会の防災計画作成に参加

- 防災への意識が高い地域の町会の防災計画作成に携わり、空き家や危険なブロック塀の把握など実際に街歩きをすることで生活者の目線に立った防災マップの作成に関わった。
- 避難行動要支援者の状況を伝えて、視覚障がい者等の立場で特に避難が困難な坂道を上る等の体験をすることで、避難経路の確認を行った。
- 活動のモチベーションを維持するために、普段からの地域活動や他の活動をしているボランティアが有事の際に活動できる被災時のボランティア募集について提案した。
- 災害時に、一番最初の防災拠点である小地域単位の活動の重要性を再確認した。

コーディネーターとしてサポートしたこと

- 地域の方からお話しを聞く機会を増やし、地域の昔話や歴史について情報をいただいた。
- 避難行動要支援者名簿の活用について、要支援者の状況把握や災害時のボランティアとのマッチングを行っている他地域の事例の紹介、情報提供をした。
- 地域住民、特に自治会・町会とささえあい推進員のつながりが強化され、地域の方に近い情報やニーズ、キーマンの把握ができ、個別支援にも活かされた。

今後力を入れていきたいこと

- 小地域圏域での活動に力を入れて実施していく。
- 災害時だけでなく、被災後の支援や予防について地域住民と考える場の実施や住民が何に困ったのか、どういう支援が必要なのか等のニーズを収集する。
- 防災・災害時や被災後の支援の仕組みと普段からのつながりづくりを意識したささえあい活動を推進する。
- コロナ禍における、新たなささえ合いの形として、オンラインやスマホの有効利用について検討する。

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 自治会・町会、地域の活動団体、個人活動者等と電話、メール、直接の聞き取りを行う。また、関係機関との連携及び情報共有を行う。
- どんな活動、取組みをしているのか、他団体との関わりがあるか、どんな発信をしているか、課題はあるかなど、活動のことや地域との関わり等、地域の状況を教えてもらうことを意識する。

この取組みを行うきっかけ

- 関係機関や住民の方から、コロナ禍で様々な地域活動が停止状態となっていることから、フレイルになる恐れが高まっているとの声があった。コロナ禍でもできる取組みについて特別出張所等と検討を行った。
- 活動団体や活動者の情報把握をする中で、「他の活動は知らない」「関わりがない」との声がある中、高齢化や参加者の減少等で今後の継続が厳しい団体もあり、知り合う機会が出来れば、お互いの活動の活性化や連携にも繋がると考えた。また、地域にとっても、社会参加できる場が多くあることは、選択肢が増え、参加しやすい環境になり、健康維持、増進にも繋がると考えた。

取組みについて

フレイル予防啓発

- 密を避けてできる運動として、ポールdeウォークを通じた取組みを行う。
- 関係機関やスーパー等の掲示板に、フレイル予防啓発のチラシやパンフレットを掲示・配布する取組みを行う。

交流会(オンライン・対面)

- 交流会の必要性やオンラインの活用状況等の確認を行う。
- 地域団体等の情報収集及び声掛け、活動状況の把握する。
- NPO 法人等を中心に、Web 会議での顔合わせ会や Web 環境がない団体は、密を避けて対面で実施した。

コーディネーターとしてサポートしたこと

- 自治会・町会や関係機関と連携を図り、多世代を意識したフレイル予防の掲示を定期的に発信した。また、スーパー等の企業へ啓発協力を相談する際は、説明を行い理解してもらうよう努めた。また、コロナ禍でも出来る取り組みの一つとして、ポールdeウォークを提案、関係機関との繋ぎを行った。
- 交流会では、お互いの活動を知る機会となるように、自己紹介や意見交換を中心とした。また、オンラインでは、進行を地域団体をお願いすることで、話しやすく、親近感のある場づくりに努めた。



今後力を入れていきたいこと

- フレイル予防について、地域活動に関する紹介や繋ぎを行い、実際に参加機会づくりを進める。
- 活動者同士の交流の機会づくりを進める。オンラインと対面双方、参加団体の状況に応じて様々な場を設けていく。また、交流機会の場の形や参加者を変えながら、新たな交流を増やしていく。課題共有や相談が出来る関係性までに発展させることを目指す。
- 地域資源を必要な方に繋げることは、ささえあい推進員にとって大事な活動なため、必要な方に届くように、今後も話し合いの場や地域の方から教えて頂きながら、繋がりづくりを進めていく。

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 活動の担い手の方や課題を抱えた方の思い、何をしたいのか、何を大事にしているのかという“声”を聞く。
- 地域に出かけていく。実際街を歩いてみる。

この取組みを行うきっかけ

- この地区の包括、地域支えあい強化推進員、特別出張所等関係者間でプラットフォームの開催について打ち合わせした後、それぞれがつながりの強い地縁関係者、活動団体の方に、活動についてのお話を伺う中で、共通の課題が見えてきたり、横のつながりの必要性を感じた。

取組みについて



コーディネーターとしてサポートしたこと

- 開催自体は少なかったものの、その間に、参加者の方を個別に訪問し、活動での思いや、プラットフォームに期待することなどの声を伺い、出来るだけ反映できるようにした。また、団体同士繋がれるよう心がけた。
- プラットフォームの中での出会いや話し合ったことをきっかけに生まれた活動を紹介した。
「参加者の声の一例」
 - ・ コロナ禍で地域の方と久しぶりにお話しすることができ、状況を知り共有する機会となった。
 - ・ 今まで、世代を超えて共通点を見つけたり、意見を言い合ったりする機会がなかったのでとても新鮮だった。
 - ・ 人との付き合いの大切さが共有できたので、災害時の協力できる体制にもつなげていきたい。
 - ・ 地域を活性化したいという意見が多くあった。

蒲田西プラットフォームの開催

- 蒲田西地域の様々な活動団体や個人が、自発的に対等な立場で参加し、お互いの活動を知り合い、話し合う場として、暮らしやすい地域を自分たちで作っていくために多様な主体が連携し、個々では出来ない活動への発展や課題解決を目指した。
- コロナの影響もあり、開催予定を数回変えざるを得ず、結果としてプラットフォームとしての開催は2回にとどまってしまった。また、本来であれば自由参加で、口コミも含め拡大したいところであったが、人数を絞らざるを得ず、各回25名程度の参加とした。しかし、話し合いは活発であり、アンケート結果からも満足度は高かった。
- 蒲田西地区にある東京工科大学の学生の参加が得られたこともあり、多世代での話し合いが行われた。

今後力を入れていきたいこと

- 活動団体の方が感じられている地域への思い、また学生など若い世代の方の地域課題への気づき、それに対する発想力をくみとり、より良い地域づくりへの支援を行う。
- 多様な人を視野に入れ、皆が住みやすい地域とは何かを、住民の方と共に考えていく。
- そのためにも、小地域での話し合いの場が必要であり、それをより住民の方が主体となって行えるよう、どう支援していけばよいか考えていく。

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 実際に地域を歩き、その地域に自分が住むとしたらどうか？という視点で地域を見る。
- 地域の人が、自分の住む・暮らす地域をどう理解しているか把握するため、地域の人から話を聞くことを大切にする。
- 上記から得られる主観的な情報だけでなく、各種メディア等からの客観的な情報も大切にする。
- 課題については「顕在化しているもの」と「潜在的なもの」があるが、重要なのは「地域(住民)の話聞くこと」と考える。

この取組みを行うきっかけ

- 令和2年4月の緊急事態宣言発令に伴い、蒲田西PFも休止状態だった。しかし、蒲田西PFには地域活動の中心となる方が集まり、「蒲田西PFの再開」が地域活動再開の区切りになると思い、「コロナが心配だからやらない」ではなく、地域活動の中心となる方が、「コロナの影響を受けて地域が困っていることにどう対処したら良いのか？」を「話し合う場」とすることが出来ないか？と考えた。また、それをテーマとして再開することが蒲田西PFの取組みにおけるモチベーションとなった。

取組みについて

蒲田西PFの開催

- 蒲田西PFの開催を通して、「地域に《分野や世代に捉われない話し合いの場》が必要」と実感した。
- 参加者の中で「PFでの出会い、つながり」ができたことの結果として、「地域にとってプラスになると感じられた」という声が聞けるようになった。
- 「出会い、つながり」を自分で地域の為に活かそうと活動して下さる方が増えた。



コーディネーターとしてサポートしたこと

- PF後の関係性づくりの一助として参加者の座席表を作成した。また、グループの同席者は初顔合わせになるよう心掛けた。
- 世代間の違いを認識する取組みとして、各グループに学生が入り、各団体の共通点探しを実施した。
- オンラインでの参加体験をサポートした。
- 蒲田西PFの意義について説明するための資料を作った。
- 開催日前後に地域団体へ訪問して意見を聞いた。
- 蒲田西PFに参加したことで、「出会いがあり、つながりができた」事例があれば、折に触れて参加者の皆様にお伝えした。

今後力を入れていきたいこと

- 既存団体だけでなく、多様な集団との対話から気づきを得られ、相互に助け合える関係性作りのきっかけになり、多分野・多世代の住民が必要と思える場を目指す。そして、蒲田西PFがモデルケースになるように取組みを継続していく。
 - 小地域（小学校区域）で行う「話し合いの場」を模索していきます。現在の蒲田西PFは、対象範囲が広いため、参加者にとってより身近で、話し合った課題に対して実際に行動を起こしやすい、小地域のPFも必要になると感じている。
- ⇒分野や世代を超えて相互理解が深まることで、各々の課題を助け合える関係性に発展することをねらう。

取組みまでの背景	
-----------------	--

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 各会議への出席、町会や地域活動団体の活動に伺い、地域の方から話を伺う。
- 個別支援からあがっている課題に対して、必要な社会資源の情報収集を行う。
- コロナ禍における地域状況・変化を把握する。
- 生活困窮者に対しての社会資源把握やつなぎ支援を行う。
- 地域福祉活動団体の活動状況把握・運営支援を行う。
- 活動場所の情報収集（公共施設以外）を行う。

この取組みを行うきっかけ

- 住民の方から相談があった際に、生活困窮・路上生活者の方へのアプローチ手段が少ないと感じた。
- 蒲田地区は多摩川に面しており、河川敷で生活している方や、蒲田駅周辺でも商店街・公園などでの路上生活の方、ネットカフェで生活している方がいる現状があり、そのような方々に対してアウトリーチする人が少ないことを知った。
- コロナの影響を受け、生活に困窮している方が増えている現状があることを知った。
- こども食堂から、「居場所の意味も必要だが、支援を本当に必要としている人達へ届けたい」との思いを伺った。

取組みについて	
----------------	--

社会資源の把握、地域活動への参加、ボランティアのマッチング

- 生活困窮者への個別支援をきっかけに、ホームレス支援を行っている活動団体の活動に参加し、医師やボランティアとともに食糧支援やチラシ配り、福祉事務所への同行など行った。
- また、社会福祉協議会に「何かしたい」との気持ちで来た小学生をボランティアとして活動団体につないだ。
- 他自治体のホームレス支援を行っている活動団体にも話を伺い、炊き出し等の活動に参加することで、潜在的な生活困窮者が増加していることを知り、このような他自治体の活動との比較から大田区の状況を客観的に把握し、情報提供を行った。

子ども食堂との話し合い

- 企業や子ども食堂と話し合い、本当に食料を必要としている子どもに支援が届きにくいという課題に対して、ささえあい推進員が、子どもと子ども食堂をマッチングするなどの話があがった。

コーディネーターとしてサポートしたこと

- 一緒に活動する・参加することを心掛けた。実際に参加することで、生活に必要な情報が届かない、行政の支援にも繋がりにくいといった人たちと長く関わり信頼関係を築いている活動者の思いを知った。
- 地域住民が、地域の身近な課題に目を向ける機会をつくっていけるようにサポートした。

今後力を入れていきたいこと

- 今後、コロナの影響がさらに大きくなり生活困窮の問題は、地域住民の生活から切り離して考えられないものとなる。フードドライブの実施や地域団体の活動への同行から、この状況下で何か力になりたいと思っている方がたくさんいることも感じた。地域住民と一緒に地域住民の生活を支えあえる生活困窮者支援を検討していきたい。

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- とにかく地域に出て、地域の様々な人と話す。
- 地域を歩く際は、常にアンテナを立てて行動し、地域情報の収集に努める。
- 何か一つのことをみんなで考え、目的を持ち、協力してやり遂げる機会を持つことが大切だと考える。地域課題の解決のためにできることは、話し合いだけではなく、例えば、他愛のない場面でも互いの思いや希望を知ること、そこから話を膨らませ大きな動きに持っていくこともできると思う。そんなお互いを知る機会にどう出会えるか、どうそれを作っていくかも重要である。それが、互いの思いや希望を叶えることに通じるのではないかと考えている。

この取組みを行うきっかけ

春に緊急事態宣言が発出され、今まで当たり前であった地域活動がストップした。各々がその中でできることをみつけ、動き始めている様子もあった。その試行錯誤の中で出てきた掲示板の案を糀谷だけでなく、糀谷・羽田地区全体で共有することはできないか、さらに各地区で各々がそれぞれに取り組むだけでなく、地域に向けての思いをもう一度一緒に振り返り、そこで共有できたことを元に地域に向けた行動を共にできないかと考えた。

取組みについて

“私の” “地域の” つながる掲示板の設置

- コロナ禍だからこそ、他者と接触できなくても地域のみなんで、こころに少し可笑し！楽しい！など何かつながりを感じることができるよう、糀谷・羽田地区の特別出張所等の8つの拠点に、自由に書き込めるメッセージ板を設置した。
- 糀谷地区では、5月の設置から単純な書き込み、手紙、絵、写真、折り紙など半年で約50件の書き込みがあった。掲示板を通して、地域の人たちとコミュニケーションをとる契機となり、今まで以上に人の輪が広がった。さらに、直接会わなくても誰かの何かによって励まされる！そんな人と人のみえないつながりを感じることができ、私たちもこのコロナ禍、大いに力をいただいた。

コーディネーターとしてサポートしたこと

- 企画にこめた思いやねらいを書面等で示し、協力先と、目線合わせをした。また、話をして感じたことや、相手の思いなどを大切にしていくように振り返った。
- 他の掲示板の様子や雰囲気、自分たちも楽しんでいることやうれしいことを共有して、地域と一緒に取り組んでいる空気づくりをした。



今後力を入れていきたいこと

- 今、何が地域にとって必要かを考える契機をつくり、地域と一緒に考えていく。
例えば、移動スーパーの状況を地域に知らせることをきっかけに、地域の中で生活面での困り事などを知ることからはじめ、そこから地域住民と考えていくことができ、結果的に移動スーパーの拠点が 증가すると嬉しい。
- フレイル予防パンの販売等を通して、障がい者施設など高齢分野以外のところと一緒に、高齢者の見守りについて検討していけると嬉しい。

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 地域の方々と、直接会えなくてもこまめに連絡（電話やメールなど）をし、気持ちは“つながっている”ということ意識できるよう配慮した。街中で偶然お会いした際の世間話や他愛のない話を膨らませて地域の情報や現状を聞き取り、共有できるよう心がけた。
- 前でも後ろでもなく、地域の方々と同じ方向を見ながら、一緒に考えたり悩んだりしながら、伴走し続ける存在であろうと意識した。
- 地域住民の声は、多数決ではなく、少数意見であっても聞き逃さず、何かにつながられるように意識した。

この取組みを行うきっかけ

- 「はなれてつながろう」をテーマに、多世代で取り組める活動をいくつか行った中で、地域の多くの人達が、それぞれの願いをこめて折り鶴を折り、一緒に完成を目指す参加型プロジェクトとして、作る過程や完成を共有することで、集まらなくても、一体感を感じながら地域でのつながりを感じることができるのではないかと考えた。
- コロナ禍で会えない誰かのことを想いながら1人が1羽の鶴を折り千人が取り組めば千羽鶴になる。また1人がコロナ禍で会えない誰かに会いに行き、地域の人1人が別の誰か1人のことを思い浮かべて、鶴を介しての見守りにもつながるのではないかととの想いで企画した。

取組みについて

一人一羽・千人千羽鶴プロジェクトの開催

- 地域最大のお祭りである「いつつのわふれあい祭り」のパネル展示に加えていただき、自治会、民生委員、シニアクラブ、特別出張所、大森南図書館、大森東地区社会福祉法人連絡会など様々な地域の人々や団体の協力の元、取り組むことができた。
- 1万羽を超える折り鶴が集まり、シニアクラブや自主グループの皆さんが素晴らしい作品を作ってください、会場を華やかに飾ることができた。



コーディネーターとしてサポートしたこと

- コロナ禍で活動自粛中の自主グループやシニアクラブの皆さんに作品作りをお願いすることで、役割創出になるよう働きかけた。その結果、別々のグループ同士で新たなつながりが生まれた。
- 単なるイベントではなく、地域の皆さんがそれぞれの場所で参加され、それぞれの想いは“はなれてつながろう”のテーマどおり“はなれたまま、つながることができた”と感じた。

今後力を入れていきたいこと

- 次年度の「いつつのわふれあい祭り」について。コロナ禍だからこそ、多世代で地域の様々な人達とのつながりを作るチャンスととらえ、地域の皆さんと一緒に考えていきたい。
- 自主グループ等が、コロナ禍における「新しいコミュニケーションツール」を活用できるようなサポートや、地域住民の新しい話し合いの場づくりを検討する。
- コロナ禍であっても、多世代で自主的に取り組める健康管理のためのツール（ゆいま〜る通帳）を専門職の方々協力の元、企画及び作成した。（4/1〜スタート）

取組みまでの背景

地域理解のために日ごろ力を入れていること

- 地区のコーディネーター連絡会、民協、地域力推進会議に出席し、地域の現状についての情報収集を行う。
- 包括を訪問し、地域の現状について情報交換を行う。
- 地域の活動場所に足を運び、どのような団体が活動しているか確認する。
- 活動場所となり得る可能性のある場所に足を運び情報収集を行う。

この取組みを行うきっかけ

- 羽田地区において活動しているサロン運営者より、「コロナ禍で活動場所として使用していた学校が使えなくなってしまい、新たな活動場所を地域内で探している」との相談があった。コロナ禍により従来の活動場所が使えなくなる問題は、他地域の活動団体からも上がっていた。
- 区内の団体などから問い合わせがあった際に、速やかにニーズを繋いでいくために、地域についての資源を把握しておく必要があると強く感じた。

取組みについて

羽田地域アセスメント

- 地域の実情を知るために、地域施設や会議に足を運び、情報収集を行う。
- アセスメントシートを用いて、あらかじめ地域についての情報を調べた。
- 民協や地域力推進会議に継続的に足を運び、出席している地域の方々との顔の見える関係づくりに取り組んだ。
- 地域で活動している団体に足を運び、活動の状況把握と生の声を聞くことを心がけた。

コーディネーターとしてサポートしたこと

- 地域福祉課、地域力推進課、見守りささえあいコーディネーター、包括等、地域の関係機関に従事する方々との連携を通して、情報を共有した。
- 地域で活動している団体と連絡を取り、お話を聞かせていただきながら、活動のサポートを行った。
- 地域の活動場所となり得る施設等に伺い、資源情報を把握し、活動場所を探している団体に紹介した。
- 地域の活動団体とのつながりを広げる中で、長年活動している団体に助成金情報など提供した。

今後力を入れていきたいこと

- 引き続き地域に対する理解を深め、様々な立場の方々との顔の見える関係を広げていく。
- コロナ禍は今後も継続することが予見される。感染予防には細心の注意を払った上で地域の現状に即した内容でのつながり方を模索していく。
- オンラインを活用した新しい形でのつながり方が出来ないか検討していきたい。
- 地域の情報をまとめ、見える形で住民にお返しができるようなものを作りたい。

